

## 国際交流としての鯉のぼり活動とその意義

著者	中村 哲
雑誌名	教育学論究
号	8
ページ	135-145
発行年	2016-12-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00025703">http://hdl.handle.net/10236/00025703</a>

## 国際交流としての鯉のぼり活動とその意義

The Koinobori Activity as an International Exchange and its Significance

中 村 哲 \*

### Abstract

The issue of “Traditional Culture Education” is as the following. If the formation of identity would be strengthened by “tradition and culture” education in each country, it would fall into the education of the narrow-minded nationalism. But education is difficult to increase the involvement in the global community without their own identity formation. The correspondence of this dilemma is the issue of education on “tradition and culture” in the global world. I will consider the activity of “Koinobori” and its significance in Kwansai Gakuin University, Japan and World as the international exchange in the global world for the issue.

キーワード：鯉のぼり グローバル文化シンボル 教材・教具

### 1 はじめに

本論文は、2013年度大学共同研究「外国における日本の『伝統と文化』に関する教育の調査研究」、2014年度大学共同研究「グローバル世界における日本文化教育に関する研究」、2015年度大学共同研究「グローバル世界における日本文化に関する教材研究」、2016年度大学共同研究「グローバル日本文化教育の理論構築と授業実践に関する研究」の継続研究の内容である。さらに、科学研究費基盤研究（C）（平成26年度～平成29年度）『『伝統と文化』教育に関する教師教育カリキュラムの開発』の研究内容とも関連する。

この継続研究は、次のような教育動向と課題を踏まえている。周知のように戦後日本の教育方針を定めていた教育基本法が、これまでの教育の現状と21世紀の教育理念に基づいて2006年12月に改正され、「我が国の伝統と文化を基盤として国際社会を生きる日本人の育成」の教育目的が意図された。そして、日本の学校教育において「伝統と文化」に関する教育の具体化が切実な課題となっている。このような教育動向において、「伝統と文化」を基盤とする日本人の育成という自国のアイデンティティー形成が強化されると偏狭な自国中心主義の教育に陥

る。しかし、自国のアイデンティティー形成なしに国際社会への関与を図る教育は難しい。このジレンマの対応が、「伝統と文化」に関する教育の課題である。

この課題に対して、日本の伝統行事である「鯉のぼり」活動をグローバル文化シンボルとして意義づけてこれまで次の論文を公表している。「『日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ』の単元開発」<sup>1)</sup>、「グローバル文化シンボルとしての鯉のぼり教材の構成」<sup>2)</sup>、「海外におけるグローバル文化シンボルとしての鯉のぼり活動の進展」<sup>3)</sup>。これらの研究内容ではグローバル文化シンボルとしての「鯉のぼり」活動の教材構成と教材活用を授業実践との関連で考察してきた。しかし、教材としての「鯉のぼり」活動をグローバル文化シンボルとして意味づけるためには、次のことが課題になる。現在、実施されている「鯉のぼり」活動がグローバル世界における国際交流としての意義を明確にすること。そこで、本論文では「鯉のぼり」活動の拠点になっている関西学院大学（以下、特別な場合を除いて「関学」と略す。）、伝統行事として実施されている日本、日本と交流が深い国々としての世界を基盤に、各基盤における「鯉のぼり」活動とその魁的活動事例をてがかりにグローバル世界における国際交流として意義を考察

\* Tetsu NAKAMURA 教育学部教授

する。

なお、教材としている「鯉のぼり」活動の動機は、和文化教育研究交流協会（2013年4月から「和文化教育学会」として名称変更。以下、学会と称す。）が、2013年3月11日に発生した東日本大震災の復興を意図して始めた「天空へ向けて舞い揚げよう『鯉のぼり』活動」にある。<sup>4)</sup> 東日本大震災は、日本社会における未曾有の危機状況を生み出すと共に、私たちに自己の生き方、社会のあり方、国家の役割、世界との関係を覚醒させた歴史的事件だと言える。このような日本社会の危機状況に対して、2005年4月から「和文化の風を学校に」の願いをもって活動してきた学会は、和文化の意義とその教育の役割を問うことが課題であると判断した。この課題に対する試みとして、学会は2011年4月3日から日本の伝統行事である5月5日の「こどもの日」前後に掲揚される「鯉のぼり」を各地域の学校園等において東日本の地域復興と子供たちの活力創生を祈念するために「天空へ向けて舞い揚げよう『鯉のぼり』活動」を開始した。

その第1の理由は、「鯉のぼり」活動が社会の危機状況に直面している人々の心を高揚し、人々の絆を強める文化価値を有するからである。「鯉のぼり」の鯉は黄河の竜門の滝をさかのぼり、さらには天空まで舞い上がって龍に変身したという中国の伝説（後漢書）を受け、日本では人生の困難を乗り越えて夢を実現する勇気象徴とされている。その意味では、この活動は、東日本大震災による悲惨な現実に対して立ち向かう人々の生き方とこれからの地域社会の復興と創造に活力を生み出す上で重要な役割を遂行できる。

第2の理由は、「鯉のぼり」活動が世界の子どもの健やかな成長を祈念する文化創造の継続的活動として世界的な活動意義を有するからである。この魁としてフランス在住の服部祐子氏（パリ日仏文化センター「エスパスハットリ」館長）が「日本のこどもの日」から「世界のこどもの日」として世界の子どもの健やかな成長と世界の平和を祈願され、2003年よりフランス国内にて実施されてきた「Koi Nobori-Fete des enfants du monde」の活動がある。なお、この活動については、「4 世界における国際交流としての鯉のぼり活動の魁と意義」において具体的に取り上げる。

このような理由から学会は、「鯉のぼり」活動の

文化的価値を世界的視野も考慮して発信し、服部祐子氏が提唱されている「鯉のぼり・世界の子どもの日」の実現を意図する文化創造の活動として継続的に取り組んでいる。さらに、この「鯉のぼり」活動の目的を踏まえて、この度の東日本大震災によって地域社会が消滅した危機的状況に対して、地域全体が人々の絆を強め、地域社会の再建を図り、新たな地域文化の創造を行う必要がある。そして、これからの地域社会の創造とその役割を担う子どもたちの活力創生を祈念して、国内外の多くの学校園等で「鯉のぼり」活動を推進する協力を依頼した。

この協力依頼に対して兵庫県では加東市と姫路市における教育委員会と学校園（幼小中高大）、広島県東広島市における教育委員会と学校園（小中）、静岡県島田市における教育委員会と学校園（小中）、東京都の世田谷区と武蔵村山市における教育委員会と学校（小中）、沖縄県石垣市教育委員会などからの活動協力の申し出を受けた。国外からも中国では協力依頼の呼び掛け文を中国語に訳し、インターネットによって発進もされ、上海市と北京市における大学と学校からも支援協力の連絡があった。さらに、ラオス、ベトナム、韓国、フランス、アメリカなどからも活動支援が拡大していったのである。

## 2 関学における国際交流としての鯉のぼり活動の経緯と魁活動の意義

### (1) 関学における国際交流としての鯉のぼり活動の経緯

関学における「鯉のぼり」活動も学会の「天空へ向けて舞い揚げよう『鯉のぼり』活動」の呼び掛けによって開始された。2011年3月11日の震災後、関西学院教育学部学生有志によって「応援鯉のぼり」を作成し、校舎間の通路に掲揚した。また、西宮聖和キャンパスにおいて2012年1月7日～8日にて開催された和文化教育第8回全国大会（大会テーマ地域社会の復興と創造をめざす和文化教育）シンポジウムにて論議議論し、「鯉のぼり」を展示し、学生有志による震災応援セレモニーを実施した。この大会をきっかけに2012年4月下旬から5月上旬までの約1週間、教育学部1号館屋上に、グローバル前院長・井上前学長・芝田前学部長のメッセージ揮毫の「鯉のぼり」、フランスと中国からの「応援鯉のぼり」、学部生有志による「応援鯉のぼり」を掲揚し、被災地域の復興と世界の子どもの幸福を祈

念した。さらに、2013年度においては西宮聖和キャンパスだけでなく、西宮上ヶ原キャンパスにおいても「鯉のぼり」活動を下記の要領で開催した。

#### 1 事業名 関学キャンパスから舞い揚げよう空の翼！

##### 鯉のぼり

##### —東北と世界へ羽ばたけ私たちの願い—

2 日時 平成25年5月5日(日)10:00~11:30

※雨天の場合、鯉のぼり掲揚のみ(10:00~16:00)

3 場所 西宮上ヶ原キャンパス時計台前集合、

新月池付近でワークショップ

中央芝生両端の2本ポールの利用

#### 4 事業主旨

これまで日本の伝統行事として子どもたちの成長を祈念するために実施されてきた「鯉のぼり」活動を、東日本大震災被災地域の復興と世界の子どもの幸福と世界平和を志向するグローバル文化活動として意義づけ、関西学院大学関係者、学会会員、一般参加者の願いをデザイン化して掲揚する鯉のぼり活動を実施する。

#### 5 プログラム

5月5日(日)

10:00—10:15 開会 (時計台前)

- ・トランペット演奏
- ・世界の鯉のぼりの紹介

10:15—11:00

—東北と世界へ羽ばたく鯉のぼりづくり— (新月池付近)

- ・鯉のぼりづくりのワークショップ
- ・学院関係園児・児童・生徒・学生有志の鯉のぼりづくり
- ・学会会員、一般参加者の鯉のぼりづくり
- ・文化総部参加部有志の鯉のぼりづくり
- ・大学登録団体有志の鯉のぼりづくり

11:00—11:30

—鯉のぼりをあげ、東北と世界へ羽ばたかせよう— (時計台前)

- ・アカベラグループによる合唱
- ・閉会

17:00 ポール掲揚鯉のぼり降納

関学における「鯉のぼり」活動が、2013年度から聖和キャンパスだけでなく上ヶ原キャンパスにおいても開催されるようになった理由は、教育学部だけの活動よりも関学全体の活動として発展を図るためには関学の象徴である時計台前に広がる中央芝生での活動が不可欠であると判断したからである。さらに、その「鯉のぼり」活動を実施する上で必要となる旗ポールが時計台を背景に中央芝生に設置されていたことも実施の要因になった。しかし、中央芝生

での活動に際して「なぜ関学で鯉のぼりを掲揚する必要があるのか」「関学と鯉のぼりはどのような関係があるのか」という意見もあり、当時の井上琢智学長に中央芝生での「鯉のぼり活動」の協力依頼書を2013年4月11日に提出し、使用許可を依頼することになった。

提出依頼書の主催は、「和文化教育学会『鯉のぼり』活動実行幹事会」となっている。そして、和文化教育学会の幹事8名が記名されている。事業名として「関学キャンパスから舞い揚げよう空の翼！鯉のぼり—東北と世界へ羽ばたけ私たちの願い—」とされ、前述のプログラムの内容に基づいて実施されたのである。

この2013年度の上ヶ原キャンパスでの「鯉のぼり」活動は、外部組織である「和文化教育学会」主体の活動であった。2014年度以降も関学の聖和キャンパスと上ヶ原キャンパスでの「鯉のぼり活動」は、毎年開催されてきている。なお、2014年度に「グローバル日本文化教育研究センター」<sup>5)</sup>が設置されたこともあり、この年度以降は、「グローバル日本文化教育研究センター」を主催に「和文化教育学会」の共催で活動を展開している。このような活動において、「グローバル日本文化教育研究センター」を基点にして関西学院の幼稚園・乳幼児保育センター・初等部・中学部・高等部・千里国際中等部・高等部にも活動協力を依頼して、各関西学院の学校園からの活動支援を受けている。具体的には、幼児・児童・生徒の「鯉のぼり活動」への参加、作成鯉のぼりの掲揚、海外での交流活動での活用などがなされている。さらに、関学同窓会の国内外の支部からも協力支援を受けている。具体的には、同窓会支部会(2014年9月27日)では関学創設125周年記念の「鯉のぼり」(関学商学部2009年度卒業生の実家である愛知県岡崎市のワタナベ鯉のぼり店制作)に関学の未来に託すメッセージ記載が実施された。2014年度にはフランス支部、2015年度には上海支部、2016年度には東京支部から応援鯉のぼりが送付され、それらの掲揚も行った。なお、教育学部では2014年9月29日から10月4日まで6号館北の掲示板前に125周年記念の「鯉のぼり」を展示し、関学の未来に託すメッセージの記載活動を実施した。さらに、関学と地域との連携として2014年度から「門戸厄神地域活性化実行委員会」も共催として参加している。関学での「鯉のぼり」活動と同様に毎年5月

5日前後に門戸商店街においても「鯉のぼり」が掲揚されている。

このように学会の呼び掛けに応じた「天空へ向けて舞い揚げよう『鯉のぼり』活動」によって開始された関学における「鯉のぼり活動」は、事業名のように「関学キャンパスから舞い揚げよう空の翼！鯉のぼり—東北と世界へ羽ばたけ私たちの願い—」として学内外に新たな文化活動を創出する役割を担うようになってきている。

## (2) 関学における国際交流としての鯉のぼり魁活動の意義

前述のように「関学キャンパスから舞い揚げよう空の翼！鯉のぼり—東北と世界へ羽ばたけ私たちの願い—」が、5月5日の上ヶ原キャンパスの活動を軸に4月下旬から5月上旬までの期間中に聖和キャンパスにおいて実施されるようになってきている。今後も関学を基点にしてグローバル文化シンボルとしての「鯉のぼり」活動の進展が期待できる。このように現在の「鯉のぼり」活動から未来の「鯉のぼり」活動への進展を図る上で、重要になるのが過去の「鯉のぼり」活動との関連である。なぜなら無限なる過去の事実の中から現在の事実との関連がなされることによって、現在の事実の意義づけと未来の新たな事実が創造されるからである。その意味では、創設125周年を超える学院史における「鯉のぼり」活動に関する歴史的事実との関連が求められる。

このような問題意識から関西学院大学の歴史を顧みると「鯉のぼり」活動に関する2つの歴史的事実を指摘できる。ひとつは、1961年に学院創設70周年を記念して実施された「ペルー・アンデス探検」の際に、関西学院聖歌隊とその卒業生の会（唱飲会）の有志が餞別として「鯉のぼり」を探検隊に贈呈したことである。他のひとつは、1984年7月に国際センター室長の藤田允氏が南メソジスト大学にて1980年度から開始された学生間の国際交流の記念として「鯉のぼり」を掲揚したことである。

前者の「ペルー・アンデス探検」は、関西学院大学山岳会と山岳部合同で、1959年の学院創設70周年を記念して企画された。<sup>6)</sup> 1950年代に英国隊による世界最高エレベートの初登頂や日本隊によるマナスル初登頂がなされた「ヒマラヤ黄金時代」の社会背景の中で、南アメリカのアンデス山脈に着目して、

「ペルー・アンデスの最高峰のワウカランを始め、コヨリティ山群、カイヤンガテ山群など、広範囲に山々を踏破することにし、併せて測量、鉱物資源や、民族の調査などを目標」として実施された。当時の文学部教授の川村大膳先生を含めて関学卒業生と在学生を核にした10名の隊員で組織された。隊長と副隊長は1961年4月29日に羽田から飛行機でリマへ出発し、リマ在住の1名を除く7名の主隊員は3月3日に大阪駅を出発し、4月2日に川崎汽船の玖馬丸にて横浜を出港した。その主隊員の歓送の際に関西学院聖歌隊と唄飲会（聖歌隊の卒業生の会）が「鯉のぼり」を餞別として贈呈したとのことである。その理由については、聖歌隊OBで鯉のぼりの贈呈に関与された多田謙一氏（1960年経済学部卒）が隊員の長井弘光（1958年経済学部卒）に送られた手紙（2012年7月13日）に次のように記載されている。<sup>7)</sup> 「『鯉のぼり』に決める時にいろんなアイデアが出ましたが、

1. 日本の文化を紹介できるもの。
2. 軽く、嵩張らず、持ち運びに負担をかけないこと。
3. 鯉のぼりは、子どもの日、かつては端午の節句の飾りで、成長、勢い、力強さ、優しさ、家族愛、平和を願う象徴といえること。
4. ワスカラン峰登頂の際に、日の丸と一緒に靡かせてもらえたらいいな。

という理由から決めました。」

「鯉のぼり」を選んだ理由として、国際交流を視野に日本文化の象徴になること、探検隊の目標達成時の記念になること、持ち運びに最適であることが指摘されている。そして、この「鯉のぼり」について長井弘光氏が、博物館開設準備室事務長桑代正一氏に「チリの日本小学校へ鯉のぼり寄贈の件」として送付された手紙（2012.06.19）に次のように述べられている。「鯉のぼりはワスカラン峰登頂成功し、隊員全員がベースキャンプに集合して、万歳を唱えた折に掲げて祝いました」。<sup>8)</sup>

さらに、この「鯉のぼり」はチリのサンチャゴにある小学校に友好の印として寄贈されたのである。その経緯についても長井弘光氏が次のように述べられている。「寄贈に至った経緯ですが、角川書店「写真集—アンデスを超えて—国産車全南米銃弾」産経新聞社南米踏査班編—カメラ：川島吉雄の中で、エクストラ・オガール・ハボンの記事を読んだことに



写真1 ワスカラン峰登頂後のベースキャンプ<sup>9)</sup>

因ります。まだまだ戦後の影が残っている時代でしたので、友好の繋がりになればと遠征時聖歌隊の有志が寄付してくれた鯉のぼりを役立てようと思った次第です。<sup>10)</sup>

このようにペルー・アンデス探検は学院史において国際世界に発信した文化活動であった。その文化活動としてワスカラン登頂記念に聖歌隊から寄贈された「鯉のぼり」を日本文化の伝統価値だけでなく世界平和のグローバルな価値をも含む象徴として掲揚したのである。その意味では、学院史において「鯉のぼり」がグローバル文化シンボルとしての役割を遂行した魁として意義づけられる。

後者の藤田充氏の南メソジスト大学にて1984年に関学との学生交流を記念にして「鯉のぼり」を掲揚したことも重要な関連がある。藤田充氏は、1925年8月29日に弘前市近郊の藤崎町にて生まれた。<sup>11)</sup> 1943年4月に関西学院大学予科に入学し、1948年に文学部哲学科を卒業した。1979年に学校法人関西学院国際センター事務長として就任された。そして、南メソジスト大学との学生交換プログラムを具体化された。このプログラムは1980年4月から始まり、各学部から推薦された学生の中から10名が選考されて、1980年4月11日に第一回交換留学生として大阪国際空港を出発した。<sup>12)</sup> なお、南メソジスト大学からの学生受け入れは、1979年9月から受け入れがなされた。その後も、このプログラムは継続され、1984年7月8日に交換留学生14名と共に藤田氏が南メソジスト大学を訪問し、7月14日に両校の親善のしるしに関学から南メソジスト大学へプレゼントした「鯉のぼり」をキャンパス内の旗ポールに掲揚したのである。この事実は、関学ジャーナル（1984年9月21日発行）に「SMUに鯉のぼり泳ぐ 親善の

しるしにプレゼント」の「見出し」で紹介されている。<sup>13)</sup> この記事の出典は、7月14日付の地元誌「ガラス・モーニング・スター」の「夏空に泳ぐ鯉のぼり」の掲載記事にある。この南メソジスト大学との学生交換プログラムは、学院史において関学が外国の大学との国際交流を推進し、現在のSGUの役割を担う大学に発展してきた先鞭といえる。そして、両校の親善のしるしとして本学の国際化を推進されてきた藤田充氏が「鯉のぼり」を南メソジスト大学にて掲揚されたことは、本学の国際化を推進していくグローバル文化シンボルとして現在と未来の関学の指針になるものと意義づけられる。

このように関西学院大学の歴史における「鯉のぼり」活動に関する2つの歴史事実は、現在実施している「関学キャンパスから舞い揚げよう空の翼！鯉のぼり一東北と世界へ飛ばせたい私たちの願い」の「鯉のぼり」活動の魁的役割を担うものであり、グローバル世界における文化交流と文化発信の推進を図る文化シンボルとしての役割を担ったことも共通する。その意味では、関学において持続的にこの「鯉のぼり」活動が実施されることは、グローバル世界における学院の創生を図る原動力になる。

### 3 日本における国際交流としての鯉のぼり活動の魁と意義

#### (1) 日本における国際交流としての鯉のぼり活動の経緯

日本における「鯉のぼり」は、現在では端午の節句としての5月5日の「子どもの日」（1948年制定）の前後に掲揚されている。「鯉のぼり」の起源については、江戸時代の中期ごろに始まったと言われていた。その根拠としては、1745年に刊行された俳諧の句集『俳諧続清鏡』（松月堂不角編）の「木枯の杜にさわぐや紙幟」の句の挿絵に旗幟の招き（依り代）として描かれていることが指摘される。<sup>14)</sup> しかし、この挿絵では幟の付属品として描かれているので、空に舞い上がる「鯉のぼり」であると言い難い。現在の「鯉のぼり」として理解できるのが、歌川広重の『名所江戸百景』（1856年）にある「水道橋駿河台」の「鯉のぼり」風景の浮世絵である。したがって、江戸時代の中期から末期の時期に「鯉のぼり」が掲揚されてきたと言える。さらに、「鯉のぼり」が掲揚されてきた背景としては、奈良時代からなされている「端午の節句」に起源があると言われ

ている。奈良・平安時代では、「端午の節句」に菖蒲やよもぎなどの植物によって邪気を祓うことによって無病息災を祈る宮廷行事が行われた。例えば、軒に菖蒲やよもぎを挿したり、冠に菖蒲を飾ったり、菖蒲の葉で薬玉を作って柱に下げたりしたのである。現在の「子どもの日」でも菖蒲湯や蓬餅などが伝承されている。鎌倉時代において菖蒲を尚武と解し、特に武家では男児の立身出世と武運長久を願い、兜や太刀を贈るようになった。さらに、室町時代では丸太や棒の先に招代（おきしろ）などの神様を呼び寄せる目印を付けた幟を立てるようになった。また、民間においては菖蒲湯、菖蒲酒、菖蒲枕などの風習が盛んになされた。江戸時代には、將軍家を含めて武士たちが世継ぎの子どもの重要な行事として武者のぼりや作り物の槍、薙刀、兜などを立てて盛大な行事をおこなった。江戸時代中期において武士の幟に対して商人らが吹流しを掲揚するようになった。その吹流しに鯉の滝登りなど絵が描かれるようになり、江戸時代末期には広重の浮世絵のように現在の「鯉のぼり」のように変容してきたと言える。

明治時代では明治10年に「お雇い外国人」として来日したエドワード・S・モース（1838-1925）が収集した当時の日本人の生活に関する写真集には長屋の多くの家が真鯉や緋鯉の「鯉のぼり」を掲揚している写真がある。<sup>15)</sup> これらの写真から日本の伝統行事として定着していた様子が窺い知れる。昭和時代においては、戦後の日本の発展を期して開催された東京オリンピックにおいて黒・赤・青・黄・緑の5色の鯉のぼりが作られたと言われているので、昭和30年代から昭和40年代においても日本の伝統行事として継承されてきたのである。しかしながら、最近では個々の家において「鯉のぼり」を掲揚する機会は減少し、地域の建物、公園、河、谷などに数多くの「鯉のぼり」が掲揚され、「鯉のぼり」活動が地域の人々の連帯意識の形成や地域観光の企画として行われる傾向が強くなってきている。例えば、明治時代からの鯉のぼり生産地であり、鯉のぼり生産量が全国一位である埼玉県加須市では全長が約100メートルのジャンボこいのぼりを昭和63年から5月3日に市民による町おこしとしてジャンボこいのぼりの開催をしている。<sup>16)</sup>

このように日本での「鯉のぼり」活動としては、家庭、学校、地域における伝統行事、伝統文化、地

域行事などの特性を有するもので、「鯉のぼり」活動を主にして国際交流を意図する活動として実施されているとは言えない状況である。しかし、これまでの「鯉のぼり活動」とは異質な「鯉のぼり活動」が開始された事例として、1995年1月17日に発生した阪神淡路大震災後と2011年3月11日に発生した東日本大震災後に震災からの地域復興を祈念して被害地域で実施されるようになった「鯉のぼり」活動が挙げられる。前述の和文化教育学会による「天空に向けて舞い揚げよう『鯉のぼり』活動」の開始は、東日本大震災が動機であった。阪神淡路大震災では静岡県から西宮市立香櫨園小学校に送られた「鯉のぼり」が、毎年5月前後に夙川に掲揚されている。また、宮城県東松山市にて亡くなった弟の好きだった「青い鯉のぼり」を兄が毎年実施している「青い鯉のぼりプロジェクト」がある。福島大学東日本大震災後の復興支援プロジェクト「Koi 鯉アートのぼり」などが挙げられる。さらに、流通科学大学では「熊本・大分・東北・神戸きずなプロジェクト」として被災地同志の連携を図る活動も行っている。これらの鯉のぼり活動は、これまでの日本の伝統文化としての「鯉のぼり」活動を社会的危機状況に直面している人々の絆と地域における文化力を生み出すものとして意義づけられる。また、この活動を通して国外の多くの人々からの支援もなされたのである。その意味では、これらの活動は国際交流というよりも国際支援という性格を有するものであるが、これまでの「鯉のぼり」活動の新たな展開を開示しているのである。

## (2) 日本における国際交流としての鯉のぼり魁活動の意義

日本の「鯉のぼり活動」の歴史において国際交流を視野に入れた特記すべき事実として、1934年3月に「国際友好鯉のぼりの会（International Goodwill “Koinobori” Society）」の設立が指摘できる。その設立の際に、この協会の活動趣旨と活動内容が英文で記載されている冊子が刊行された。<sup>17)</sup> この冊子には、鯉のぼりの意味や歴史、協会設立の背景、協会設立の動機、協会の活動内容などが記載され、世界の国々の人々に世界平和を希求する協会活動への協力依頼がなされている。この協会設立には、東北大学法文学部学生であった土井英一（1909.9.17~1933.9.9）氏の構想と活動が牽引になったのである。な

お、英一氏の父は土井晩翠（1871～1952）である。彼は子供のころから世界平和と国際親交に深い関心を寄せていた。中学校時代からザメンホフ（1859～1917）が世界平和を願って創案した国際共通語のエスペラントを熱心に学習し、手紙や情報の交換によって他国の人々との交流をするようになった。そして、真摯に国を愛することは人間性と平和への愛情を必然的に生み出すという思いを強く持つようになったのである。<sup>18)</sup>さらに、1931年9月18日の南満州鉄道線路の爆破事件（柳条湖事件）を端にして日本と中国の武力紛争の満州事変が起きた社会的状況において英一氏は日本人の真のこころを世界の人々が正しく理解できる試みの必要性を痛感するようになった。また、英一氏の国際親善の活動に協力していた姉の照子（1906～1932）が、亡くなる前に世界平和を祈り、世界の子供たちに「鯉のぼり」を送ってきたこととその必要性を話されたのである。<sup>19)</sup>

英一氏の国際文通活動において最も親しくなったのが、ドイツのマルバハに住んでいた小学校校長のヨハネス・シュレイダー（Johannes Schröder）であった。彼とのエスペラントによる交流を深める中で、彼の小学校の児童たちに真鯉と緋鯉の「鯉のぼり」を送ったところ児童たちが大変に喜び、ドイツの空に掲揚し、多くの感謝の手紙を送ってくれたのである。さらに、「鯉のぼり」は子供たちの成長と幸福を生み出す忍耐と勇気を象徴する意味も理解されていることに感動したのである。<sup>20)</sup>英一氏はこの交流体験を通して世界平和を推進するには「鯉のぼり」に象徴されている忍耐と勇気に共通する精神性が求められると強い信念を持たれたのである。

このような当時の社会的状況とこれまでの国際交流の活動を踏まえて英一氏が、世界平和を会の使命とする「国際友好鯉のぼりの会」設立を祈念されたのである。しかしながら、英一氏は中学校時代から健康を害しており、1933年9月9日に大学在学中に結核のため病死されたのである。「国際親善鯉のぼり協会」は、英一氏が亡くなられた翌年3月に彼の構想と活動を永続的に推進するために設立された。協会の役員として次の方々が明記されている。<sup>21)</sup>二荒芳徳（1886-1967）貴族院議員ボーイスカウト協会会長。姉崎正治（1873-1949）東京帝国大学名誉教授。高楠順次郎（1866-1945）仏教学者。山室軍平（1872-1940）救世軍士官。和田英作（1874-1959）



写真2 世界に送付した「鯉のぼり」  
（「吉徳」資料室提供）

東京美術学校校長。齊藤惣一（1886-1960）YMCA書記長。杉村陽太郎（1884-1939）前国際連盟事務局次長 イタリア大使。内ヶ崎作三郎（1877-1947）衆議院議員。鶴見祐輔（1885-1973）作家 講演家。賀川豊彦（1888-1960）牧師 作家。芳澤謙吉（1874-1965）前外務大臣。このように当時の著名な政治家、教育者、学者、宗教家、作家などの人々が昼食会の会議を何回も開催し、協会設立と活動について議論をしたのである。そして、平和を託した100匹を超える「鯉のぼり」を英国、フランス、イタリア、アメリカなどの多くの国々の若者の集団や組織に贈る活動を開始したのである。これらの活動によって世界の各地から平和を託した活動の趣旨と「鯉のぼり」活動への賛意の手紙が送付されてきたのである。<sup>22)</sup>

このように日本の歴史において第2次世界大戦が始まる社会的状況の中で、世界平和と国際交流の理念を持続的に実現するために「国際友好鯉のぼりの会」が設立され、世界の国々の人々に世界平和を託す「鯉のぼり」を送付する活動がなされた歴史事実自体が驚嘆の事実である。そして、「国際友好鯉のぼりの会」の「鯉のぼり」活動が伝統行事としての性格から世界に向けて世界平和と国際親善を図る象徴としての性格を有する文化的役割を担った魁としての意義が見出される。その意味では、「関西学院グローバル日本文化教育研究センター」主催で実施している「関学キャンパスから舞い揚げよう空の翼！鯉のぼり—東北と世界へ羽ばたけ私たちの願い—」の「鯉のぼり活動」の理念とも共有する。

#### 4 世界における国際交流としての鯉のぼり活動の魁と意義

##### (1) 世界における国際交流としての鯉のぼり活動の経緯

「鯉のぼり」が、国際交流を意図して世界で掲揚された始まりは、1873年5月1日から10月31日まで

開催されたウイーン万国博覧会にある。この万国博覧会の参加は、明治政府として最初であった。博覧会場本館にて日本列品所が開設され、陶磁器（伊万里・瀬戸・九谷）、美術工芸品（浮世絵・扇子・七宝・象嵌・金銀細工）、織物や素材（西陣織・生糸）、紙の張抜（金鯰・鎌倉大仏）などが展示された。さらに、会場敷地に、鳥居・神社・反り橋もある日本庭園なども建設した。そして、この日本庭園の左側面に旗柱が建てられ、「鯉のぼり」が掲揚されたのである。

この鯉のぼりについては、ウイーン万博出品目録には、「紙鯉」として三間と二間が各3匹、一間が10匹、三尺が10匹、七間が二匹と記載されている。また、これらの出品人が「東京・能登屋幸藏」となっている。なお、これらの一匹がドイツ国立図書館ライプツィヒ館に収納されている。さらに、万国博覧会との関連で「鯉のぼり」について調べると、1893年5月1日から10月3日までアメリカのシカゴにてコロンブスのアメリカ大陸発見400年を記念して開催されたシカゴ・コロンブス万国博覧会の日本館正面に掲揚されたことも指摘できる。この日本館は宇治の平等院鳳凰堂を模した「鳳凰殿」として建設され、日本庭園も造られたのである。さらに、鳳凰殿は3棟の建物によって構成され、正面は江戸時代の大名家邸、左側は鳳凰堂を模した平安時代の貴族の館、右側は室町時代の書院と茶室を併せた建築様式になっていた。各建物ではそれぞれの時代の特徴を示す美術・工芸品が展示された。正面の大名家邸の両側に旗柱が設置され、「鯉のぼり」が掲揚されたのである。このように日本が万国博覧会に参加することは、近代国家としての日本が世界の国々との交易と交流を推進すると共に、開国の際の不平等条約

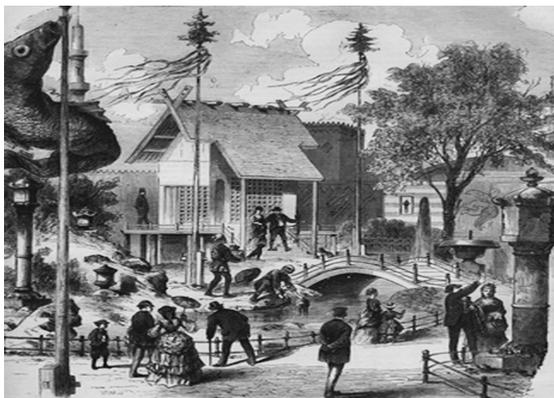


写真3 ウイーン万国博覧会の日本庭園<sup>23)</sup>



写真4 シカゴ・コロンブス万国博覧会の日本館正面<sup>24)</sup>

の撤廃を視野に文明国としての日本を世界に示すことも意図されていた。このような万国博覧会の会場にて「鯉のぼり」が掲揚されていたことは日本における国際交流としての「鯉のぼり」活動の魁であると意義づけられる。

前述したように第2次世界大戦が始まる社会的状況の中で、世界平和と国際交流の理念を持続的に実現するために「国際友好鯉のぼりの会」が設立され、世界の国々の人々に世界平和を託す「鯉のぼり」を送付する活動がなされたことは稀有な事実であった。一般的に「鯉のぼり」活動も含めて国際交流が盛んになり始めたのは、1964年4月から実施された海外渡航自由化がなされてからである。そして、日本の経済的發展と文化的関心が強まってきた1990年代以降から日本人の海外渡航が増加し、日本企業の海外進出も顕著になされてきたのである。さらに、21世紀に入ると、特に2010年ごろから海外からの観光客も増加してきている。このように世界の国々の人々との交流が拡大し、進化することに伴って個人、家族、学校、企業、公共団体、政府など多彩な形態で国際交流が図られている状況である。このような社会的状況において国際交流としての「鯉のぼり」活動も多種多様な形態で実施されている。

例えば、「世界の空を泳ぐ鯉のぼり」として「鯉のぼり」企業のウェブページを参考にすると、次のような「鯉のぼり」活動が紹介されている。<sup>25)</sup>1992年に第32次南極観測隊により、南極に鯉のぼりが掲揚された。1993年第76回ライオンズクラブ国際大会がミネアポリスで開催され、「鯉のぼり」のオープニングパレードが優勝した。1996年パリコレクションにて日本人デザイナーの荒川信一郎氏による「鯉のぼり」ファッションが紹介された。1997年「鯉の

ぼり」ファッションショーが神戸にて開催された。1999年ウイーンのシェーンブルグ宮廷の日本庭園にて「鯉のぼり」が掲揚された。2001年イギリスのチネシヤス号の帆船築造記念としてマストに掲揚された。2003年「日仏文化センター」主催の「鯉のぼり」活動としてパリ市内に掲揚された。2003年トルコと日本との文化交流として開催された現代美術の展覧会に展示された。2005年「日仏文化センター」主催の第3回「鯉のぼり」活動にてパリ市内と近郊都市に掲揚された。上野の東京国立博物館にて「鯉のぼり」をテーマにしたファッションショウが開催された。207年万里の長城にて掲揚された。2006年「日仏文化センター」主催の第6回「鯉のぼり」活動にて日仏友好150周年記念も含めてパリ市内で掲揚された。2010年中国の大連市にて「鯉のぼり」生地のファッションショーが開催された。2012年ブータンにて東日本大震災支援の感謝を込めて掲揚された。

これらの国際交流を意図した「鯉のぼり」活動としては、「鯉のぼり」の掲揚としての活動と「鯉のぼり」に関連する素材やデザインを活用した「鯉のぼり」の関連活動に分かれる。したがって、「鯉のぼり」活動は伝統文化としての「鯉のぼり」の掲揚だけでなく、生活文化としての多様な活用がなされているのである。このような多様な「鯉のぼり」活動の中で国際交流を視野に「鯉のぼり」の掲揚を実施している活動としては、前述の「世界の空を泳ぐ鯉のぼり」活動として繰り返し紹介されている「Koi Nobori-Fete des enfants du monde」が評価できる事例である。

この活動は、フランス在住の服部祐子氏（パリ日仏文化センター「エスパスハットリ」館長）が「日本の子どもの日」から「世界の子どもの日」として世界の子ども達の健やかな成長と世界の平和を祈願され、2003年よりフランス国内にて実施されてきた活動である。<sup>26)</sup> 服部氏は「21世紀を担う世界の子ども達の明るい将来を願う人道的、文化的事業」として、「日本の子供の日」が「世界の子どもの日」になることを意図してユネスコ本部の支援を受けて実施してきたのである。そして、パリ市内とフランス地方都市にて「鯉のぼり」を掲揚し、日本文化の紹介と国際交流の様々な活動を行ってきたのである。このような毎年の活動を通して「Koi Nobori」の言葉が、フランスでは「平和」の合言葉となり、国際的祭典

として知られるようになってきている。また、この度の東日本大震災に際して、フランスの青空で泳いでいた「鯉のぼり」に応援メッセージを添えて、「未来の夢の社会」の建設に向けて日本の力を生み出すことを呼びかけ、救済活動もされたのである。その意味では、「鯉のぼり」は国内における伝統行事や地域イベントとしての活動だけでなく、世界における文化交流と文化創造としての活動であると意義づけられる。

## (2) 世界における国際交流としての鯉のぼり活動の意義

世界の「鯉のぼり」活動の歴史において国際交流を視野に入れた特記すべき事実として、1919年頃に当時のフランス首相であったジョルジュ・クレマンソー (Georges Benjamin Clemenceau) がサン・ヴァンサン・シュル・ジュールにある (Saint-Vincent-sur-Jard) 別荘に日本から送られた「鯉のぼり」を掲揚し、その後も「鯉のぼり」が掲揚されてきていることが指摘できる。<sup>27)</sup> この事実については、1919年1月から第一次世界大戦の終結対応を討議するために開催されたパリ講和会議に参加したフランス首相ジョルジュ・クレマンソーに日本の代表者である西園寺公望 (1849-1940) が「鯉のぼり」を贈呈したところ、クレマンソーが「鯉のぼり」を気に入り、別荘に旗ポールを建て掲揚したと言われてきた。その理由としては、西園寺公望が1871年から1880年までのパリ留学期間中にソルボンヌ大学での親友がクレマンソーであったこと、さらにクレマンソーは東洋美術、特に日本文化に非常に関心を持っていたことが指摘できる。大学時代の親友が、お互いに政治家として国を代表する人物になり、第一次世界大戦後の世界平和の実現を話し合う歴史的会議に再会することになった。そして、このパリ講和会議後に国際平和機構として国際連盟が設立されることになったのである。その意味では、20世紀初めに世界平和の実現を意図して開催された歴史的会議に介在した公望とクレマンソーの親友としての人間関係を起因にして「鯉のぼり」が掲揚されたことは、前述の英一氏が祈念した世界平和と国際交流を図る象徴としての「鯉のぼり」との共通性も指摘できる。

なお、クレマンソーの「鯉のぼり」に関して当時の在仏日本大使の『松井慶四郎自叙伝』では、「講和会議余談」として次のように紹介されている。<sup>28)</sup>

1920年1月に講話会議が始まる前にクレマンソーから「日本で男児の誕生に鯉幟を立てる習慣があるというが、ドーいうわけか」との問いかけがあった。「日本通俗の伝統では、鯉は滝をも登るといい元気のよい魚ゆえ、五月の節句を祝する時に大きな鯉を高く掲げ、風に吹かせて之を喜ぶ」等の説明をしたところ大変に興味を示されたので鯉のぼりと節句人形を贈呈することになった。松井大使は、日本の義兄に鯉幟大中小と5月人形の送付を依頼した。4月末にフランス大使館で日本からの鯉のぼりと人形を受け取り、クレマンソーに贈呈することになった。贈呈する際に、松井大使はローマでの第三回国際連盟理事会に出席しなければならないので、大使夫人が鯉のぼりと人形についての説明と贈呈をされた。その時に、中形の「鯉のぼり」を別荘に掲揚したいと言われた。そして、5月26日にクレマンソーから松井大使夫人宛てに礼状が届いた。中形の鯉のぼりを別荘に旗柱を建てて、掲揚したとのことである。なお、日本から送られた「鯉のぼり」は現存し、修復中である。しかし、別荘であったクレマンソー館では、いろいろな方法で入手した「鯉のぼり」を、現在も掲揚しているのである。

このようにクレマンソーが入手した「鯉のぼり」が、約100年前からサン・ヴァンサン・シェル・ジュールのクレマンソーの別荘にて毎日掲揚されてきている事実は、過去から現在、そして現在から未来へ持続的に世界平和と国際交流を図る活きたグローバル文化シンボルとして意義づけられる。

## 5 おわりに

本論文では、「鯉のぼり」活動の拠点になっている関西学院大学、伝統行事として実施されている日本、日本と交流が深い国々としての世界を基盤に、各基盤における「鯉のぼり」活動とその魁的活動事例をてがかりにグローバル世界における国際交流として意義を考察した。関学、日本、世界の基盤において現在なされている「鯉のぼり」活動が、各基盤の過去において魁となる「鯉のぼり」活動と関連し、未来への新たな「鯉のぼり」活動の原動力になる世界平和と国際親善の文化価値を創造していくグローバル文化シンボルとして意義づけられる。今後、このようなグローバル文化シンボルとしての「鯉のぼり」活動の継続と普及を図ることが課題になる。

## 注

- 1) 拙稿「『日本の鯉のぼりから世界の鯉のぼりへ』の単元開発—グローバル文化シンボルとしての鯉のぼり活動を意図して—」、関西学院大学『教育学論究』第5号 2013年12月 pp.95-105.
- 2) 拙稿「グローバル文化シンボルとしての鯉のぼり教材の構成」、関西学院大学『教育学論究』第6号 2014年12月 pp.111-121.
- 3) 拙稿「海外におけるグローバル文化シンボルとしての鯉のぼり活動の進展」、関西学院大学『教育学論究』第7号 2015年12月 pp.119-129.
- 4) 「関学のキャンパスから舞い揚げよう空の翼！鯉のぼり」については、「和文化教育学会」の次のページを参考にされたし。  
<http://30.pro.tok2.com/~wabunka/sonota.html>  
拙稿「社会的危機状況における『伝統と文化』の意義～天空に向けて舞い揚げよう鯉のぼり活動をてがかりに～」人間教育研究協議会編『教育フォーラム50 〈やる気〉を引き出す・〈やる気〉を育てる』金子書房2012年12月 pp.135-145.
- 5) 「関西学院大学グローバル日本文化教育研究センター」については、次のページを参考にされたし。  
<http://www.kggjcec.jp/>
- 6) 川村大膳「ペルー・アンデス探検隊報告」関西学院山岳会・関西学院大学体育会山岳部『エーデルワイス 1961年度ペルー・アンデス遠征特集』13号 1962年12月 pp.28-29.
- 7) 聖歌隊OB 多田謙一氏から山岳部OB 長井弘光氏へ送付された2012年7月13日付けの書面である。その内容を山岳部OB 長井弘光氏から学院史編纂室へ送付された2012年7月14日付けの書面である。
- 8) 山岳部OB 長井弘光氏から関西学院大学博物館開設準備室事務長桑代正一氏へ送付された2012年6月19日付けの「チリの日本小学校へ鯉のぼり寄贈の件」の書面である。
- 9) 写真は山岳部OB 長井弘光氏から学院史編纂室へ2012年7月14日付けの書面で寄贈していただいたものである。
- 10) 前掲2012年6月19日付けの「チリの日本小学校へ鯉のぼり寄贈の件」の書面である。
- 11) 藤田允氏追悼文集編集委員会『「藤田さん」—藤田允氏追悼文集』2006年11月。
- 12) 「期待を胸に南メソジスト大へ」『関学ジャーナル』1980年4月21日 第29号。なお、関連記事が次の『関学ジャーナル』にも掲載されている。「満喫したMUの1年間」『関学ジャーナル』1981年4月22日 第38号。「SMU 留学体験を語る」『関学ジャーナル』1983年11月30日 第55号。
- 13) 「SMUに鯉のぼり泳ぐ」『関学ジャーナル』1984年9月21日 第60号
- 14) 「『俳諧統清鈔』より 法眼不角編 延享2年(1745)刊」山田徳兵衛『図説 日本の人形史』東京堂出版平成3年8月 初版 p.142.
- 15) 『モースの見た日本』小学館 1988年5月
- 16) 加須市ジャンボこいのぼり <http://www.mapbinder.com/Map/Japan/Saitama/KazoShi/Koinobori.html>
- 17) International Goodwill “Koi-nobori” Society 1934. pp.1-28.

- 18) 同上書 pp. 11-12.
- 19) 同上書 p. 12.
- 20) 同上書 pp. 12-13.
- 21) 同上書 pp. 15-16.
- 22) 同上書 p. 21. 「国際友好鯉のぼりの会」が世界の国々に送付した「鯉のぼり」と冊子が、「吉徳」資料室（浅草橋）に保管されている。
- 23) ウイーン博覧会の日本庭園の資料。  
「きまぐれな未来」 kyo2010.exblog.jp
- 24) 「『閣竜世界博覧会美術品画譜』より 久保田米遷画 明治二十六年（1893）」山田徳兵衛『図説 日本の人形史』東京堂出版 平成3年8月 初版 p. 129.
- 25) 「世界の空を泳ぐ鯉のぼり」については、次のページを参考にされたし。  
<http://nitta-inc.co.jp/shoping/koinobori/30.html>
- 26) バリ日仏文化センターについては、次のサイトを参考にされたし。 <http://www.ccfj-paris.org>
- 27) “CLEMENCEAU LE TIGER ET L'ASIE” Musee national des arts asiatiques-Guime, Paris 2014 p. 276, pp. 302-304.
- 28) 松井慶四郎『松井慶四郎自叙伝』刊行社、昭和58年6月20日 pp. 107-108.